

令和3年（2021）

■ 8月6日（金）

連日、最高気温が35°を超えています。日なたの地面の温度は50°を上回りますが、調査区にテントをかけ渡して日射しをやわらげ、暑さをしのいでいます。加えて、傍らにある木立が午後の強烈な日射しを遮ってくれています。

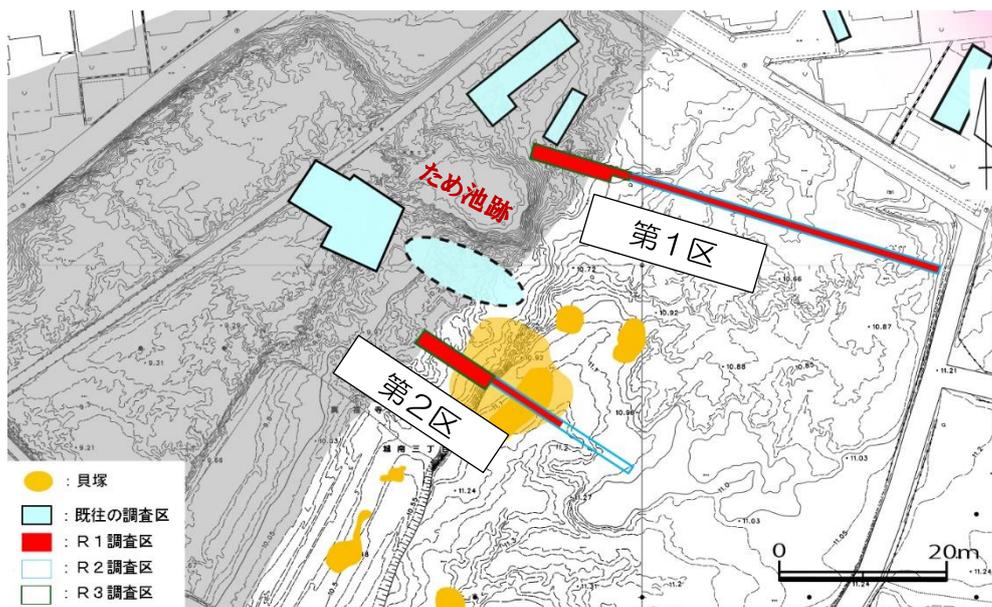


図1 調査区の位置

① 第1区（北側の調査区）の調査

江戸時代のものと想定している杭列遺構周辺の暗褐色土の掘り下げを進めました。

杭列の西側では、その根元近くに接して樹皮が立てかけられている様子を確認しました。この樹皮は側板として、土留めの役割を果たしていたものと思われます（写真1）。

縄文時代晩期の堆積土層である黄褐色土は、この遺構によって失われているところが相当ありますが、それでも残された範囲からは、晩期前葉～中葉（安行3b～3c



写真1 小杭列遺構に沿った樹皮の土留め

令和3年（2021）

式)の遺物が出土します(写真2・3)。これらは西側に向かって、急傾斜した状態で検出されるものが多く、当時の黄褐色土層の堆積角度を反映したものとされます。



写真2 急角度で傾く土器（杭列遺構の北側）



写真3 急角度で傾く土器（杭列遺構の北側）

令和3年（2021）

また、本層からも有文の土器に伴って、製塩土器が出土しています（写真4の下側）。年代を把握しやすい有文土器（文様が付けられている土器）とセットで出土したこと、しかも、堆積層を順に調査している中で出土したことにも大きな意義があります。真福寺縄文ムラの暮らしを支えた活動を解き明かす材料の蓄積が着実に進んでいます。



写真4 有文土器とセットで出土した製塩土器（黄色の矢印）

※写真3に写っている土器群です